

論 文

花田仲之助の報徳会運動—山口県を中心に—

井 竿 富 雄

はじめに

一 花田の前半生

二 報徳会の運動

三 山口県における報徳会運動
小括

はじめに

本論文は、花田仲之助（一八六〇—一九四五）という人物の率いた報徳会の思想と運動を明らかにするための作業である。ここでは、おもに彼らの活動が盛んであったとされる山口県を中心にして、その思想・主張・そして活動を明らかにし、この報徳会の運動がいったいどのようなものであったかを知る手がかりにしていくことにしたい。

「報徳会」というと、たいていの場合には二宮金次郎の思想を掲げた運動の方を想起する。また、先行研究もこちらの方が有名である¹⁾。江戸時代末期に活動した二宮金次郎の（普通は二宮尊徳の名前で知られている）運動を応用し、明治期になっていくつかの分岐をしながら「報徳会」という名前で行動したものである。彼らは二宮金次郎の著作集を刊行し、あるものは西洋の経済思想などと接合させたりしながら自らの運動を展開した。先行研究によれば、それはやはり資本主義経済導入前後、農村の経済的な復興などを支えた思想と運動となっていたようである。さらに日本政府の肝煎りで「中央報徳会」が創設された。これはむしろ地方自治のための官製運動の性格が強くなっていったように考えられる。

しかし、ここで取り扱う花田仲之助の報徳会運動は、後述するようにこれら

のものとは全く性質が異なる。同一の名称を掲げ、指導者花田自身の著書の中で言及されることもあるが、あくまで二宮金次郎の思想を掲げた団体ではなく、明治天皇の発した「教育勅語」の精神を日本社会に根付かせようとする試みの一つであった。農村復興のような経済的目標を掲げているわけでもなかった。運動としては村落等で小集団を作らせ、彼らが相互に抑制しながら国家意識の向上などにエネルギーを集中させようとしているのである。具体的には、きわめて卑近な生活習慣上の瑣事に国家的な儀礼を織り込んで習慣化させ、そこから愛国的な人士を作り出そうとしていた。

花田の報徳会についてはほとんど研究がなく、並松信久氏の著書が、一章を割いて「もうひとつの報徳会」として論じているのが目を引く程度である²⁾。最近、日本の道徳教化運動と「思想善導」という点から出された山本悠三氏の著書³⁾では、巻頭に花田の報徳会が扱われているが、あくまで全国にいくつかあった道徳教化運動のひとつとして扱われるにとどまっている。大規模組織とは言え全国展開はしておらず（関東以北にはあまり組織がないようである）、活動としては一見地味である。しかし彼らが行った、日常茶飯事をひたすら実行することと国家への忠誠心養成が一体化するという活動は注目すべきではないかと考えている。それはひいては、日本社会が今日まで持っている政治的性格などときわめて地続きではないかと考えられるからである。

ただ、本論文はまだ花田報徳会（本論文では、どうしても他の報徳会と活動を区別する際には「花田報徳会」を用い、そうでない場合は「報徳会」とする—井竿）について筆者が考察を始める端緒にとどまる。また、史料的にも極めて限られたものであり、将来的には見解の変更もありうることを予めお断りしなければならぬ。本論文では、刊行史料等で得られた花田の生涯、報徳会が出した機関誌などから見る報徳会の主張と活動、そして刊行史料等をかなり残

し、報徳会自身が活動を評価していたとされる山口県宇部市の報徳会について明らかにしていく。はなはだ断片的な考察の集成にとどまるが、政治史的に報徳会を扱う準備作業として考えていきたい⁴。

一 花田の前半生

本節では、報徳会運動の創設者であった、陸軍軍人花田仲之助の前半生について概略を述べていきたい。すでにこの前半生自体が相当不思議な内容を持ったものである。その後の人生にも大きく作用していることは疑いない。ここでは、主として戦前編纂された報徳会の通史や、その記述の一部を用いて戦後刊行された花田の伝記などによって述べていくことにしたい。文書などを見られているわけではなく、公式伝記であるからかなり美化されたり削除されたりしている部分も多いと考えられるが、今のところはやむを得ない。

花田は元来鹿兒島の武士の子であった。先祖は一時冤罪をこうむりかなり苦労したということも伝記には書かれている。花田は維新後、幼くして西南戦争で薩軍に加わって戦った経験がある（のちの報徳会運動では、このとき政府軍に加わって戦った軍人も共闘している）。西南戦争後花田は方向転換を図り、新政府の軍人となるべき道に進んでいった。陸軍士官学校へ入学したのである。

しかし、士官学校卒業後、花田には試験が訪れた。花田の父が借財の保証人になっていたため、この借財で家計が傾いたのである。職業軍人として活躍しようと考えていた花田はこの時悩んだが、結局一度軍人を休職して鹿兒島に帰郷し、実家の家計立て直しに奔走することになった。この時、東京から鹿兒島まで徒歩で帰郷するという驚くべき行動に出ている。帰郷の決断をする前に花田は鎌倉の禅寺にこもり修行し、「松蔭」という号を授与された。この時代から、花田は仏教や僧侶とのかかわりが生まれているように考えられる。ただ、この時代は花田にとってはつらい時代であった。継母との関係が微妙であった上に、継母の子であった母違いの弟が熊本の中学校に在学中病没している。

実家の家計再建を済ませた後、花田は陸軍に復職し、日清戦争従軍後新たな軍務につくことになった。ロシアでの諜報工作である。浄土真宗西本願寺派の協力を得て、花田は情報員としての活動準備を行った。参謀本部付きになったあと突然姿を消したのである。伝記によればこの際、京都に身を移して僧侶に

成りすますための訓練をしていたといわれる。花田は僧侶「清水松月」と名乗り、次に山口県大島で実際に僧侶として活動した。住民に全く軍人であると悟られないかどうかのチェックも兼ねていただろう。このような準備の後、一八九七年に花田はロシアに旅立った。

浄土真宗の僧侶・清水松月は、読経や法話はあまりうまくなかったが、ロシアの日本人居留民には丁寧な僧侶として遇されていたという。清水こと花田は、一部居留民などの協力を得ながら情報収集に動き始めていた。この時代の花田については、陸軍の諜報員として貴重な回顧録を残した石光真清が書きとめている。あるとき、陸軍の田村怡与造参謀次長がウラジオストクを訪れ、花田のいる浄土真宗の布教所にやってきた。田村は情報収集について質問をするが、花田はあくまで軍人の素顔を見せず、僧侶清水松月として応答していた。怒った田村が「どうだ、軍人の務めを果たすか、坊主になるか、はっきり返答してもらおう」と問うたのに対して、花田は「私は坊主で結構でございます」と言い切った。石光の書き残していることが事実であるならば、花田は自身が鹿兒島出身であることも隠し通して活動していた。居留民に長崎あたりの方言で話しかけたりしていたのである。このウラジオストク時代、花田は安倍道暎という浄土真宗の僧との関係も持っていた。

花田は帰国後「対露時務卓見」と題する長文の意見書を執筆した。ロシアとの戦争に対して、日本は準備が不足しているという内容であった。そして一旦軍務から離れ、鹿兒島に帰郷した。ここから花田の次の活動の始まりだった。それがこの論文で扱う「報徳会」の創設であった。

一九〇一年二月、花田は「東亜報徳会発起趣意」を書き、「東亜報徳会」と題する道徳修養団体を作ることとを表明した⁵。その手始めとして「花田氏親戚報徳会」を結成したのである。この時点では単に家族単位の修養団体でしかなかったのだが、わずか二か月後には実家の町内などを糾合した「平方（ひらほう）報徳会」（のちには「山下報徳会」と称する）が創られる。この報徳会は「三年続いたら永続させる」という方針だった。しかし、親戚報徳会結成からわずか一年で活動は鹿兒島市全域におよび「鹿兒島市報徳会」が創られたことでもわかるように、報徳会は急速にその活動範囲を拡大していた。伝記ではこの際、地元紙から執拗に批判キャンペーンを張られたとある。とはいえ、家族集団内部で作った団体が、わずか一年で県庁所在地全域をカバーしうる組織となった

ことは驚嘆すべき現象である。ところがこの一方で、報徳会は鹿児島では伸び悩んでいくのである。

そのさなか、花田はもう一度軍に身を投ずることになった。一九〇四年、日露戦争が勃発したためである。花田は日露開戦直前に召集され、また表舞台から姿を消した。花田が命じられたのは再び特殊工作だった。中国人に変装し、中国人馬賊などを交えたゲリラ戦部隊「満洲義軍」を編成し、ロシア軍を後方から攪乱したのである。花田は「満洲義軍総統花大人」と名乗り、中国東北地方で現地の中国人馬賊をひきいれたり、大陸浪人として名高い根津一などとの親交を持ちながら作戦を展開していた。また、花田が知り合った東大文学部出身の僧侶兼将校であった植村宗光もこの作戦に参加している。この時期のことは第二次世界大戦開戦前後まで一般に知られることはなく、日米戦争期に各種の回顧録等が刊行されて多くの人が知るところとなった。⁹ 花田はこの満洲義軍時代にも、義軍の占領地域であった中国東北部・通化に「日清聯合報徳会」を結成していた、という。¹⁰ 日本よりも早く、海外に報徳会は種をまいていたのである。

日露戦後、花田は本格的に報徳会の活動を展開していく。それはすさまじい勢いであった。次の節では、報徳会の活動方法などを見ていくことにしたい。

二 報徳会の運動

一九〇六年、日露戦争から帰還した花田は、会の名称を正式に「報徳会」とした。「報徳」を冠する団体はほかにもあるのだが、花田はここで「東亜」を会の名称から外した。こののち、報徳会は活発な活動を展開することになった。一九〇八年には宮崎県に報徳会が広がり、翌年には鹿児島市内に独立した報徳会事務所ができた。一九一一年には、機関誌『報徳』（月刊誌）が創刊された。¹¹ ここでは、報徳会の運動スタイルやその実行内容などを、この機関誌『報徳』や、花田の著書から確認していくことにしたい。

花田の報徳会は、まず花田や他の幹部が全国各地へ出向き、そこで講演を通じて報徳会結成の必要性を説く。この結果、その土地の人々が自主的に報徳会を結成し、活動を始める、というパターンが続いていくことになる。たいていの場合は、各地の自治体が報徳会の活動に関心を持ち、その結果住民に報徳会

活動をやらせるということになっているようでもある。これは各地の史料を確認していかなければわからない。各地の報徳会は鹿児島（のちには京都）との報徳会本部とは直接の上下関係はなく、花田の主張に共鳴するだけという緩い結合を保っていた。機関誌の誌面を見ると、どうも広告と会員からの寄付で運営されていたようである。ある時期からは、機関誌に掲載される「報徳会細則」を各地の報徳会がマニュアルとして利用することができるようにされていた。また、機関誌で確認できる花田の活動は恐るべきもので、夜行列車等を利用しながら全国及び海外を猛烈な勢いでかけめぐり、ほとんど鹿児島へは戻っていない。¹² これをほぼ一九三八年まで続けていたのである。

花田報徳会の思想的中核は「教育勸語」であった。たいていの場合、報徳会を名乗る団体は二宮金次郎の思想を掲げて活動する。ところが、花田の最初の著書『報徳修養実践講話』¹³にあるように、花田の報徳会は二宮金次郎の思想を掲げない。中心にあるのは「教育勸語」である。機関誌『報徳』には、表紙をめくると必ず赤字で教育勸語全文が掲載される（新しい詔勅などが出た場合はそれが載ることもある）。教育勸語の精神を社会生活全体に貫徹することで、思想的な面から国家を支えるという仕掛けである。そのため、報徳会はのちに財団法人化するまで、「会長」を置かなかった。「報徳会は天子様を会長様に戴くのであります」と花田自身も述べている。¹⁴ 報徳会の長は天皇であり、あとの人間はたとえ花田でも世話役に過ぎないのである。報徳会が財団法人化した時には花田も初代理事長になった（一九三二年まで）が、それまでの地方行脚をやめたわけではないようである。

しかし、花田は単に思想を説くだけで満足しているわけではなかった。報徳会は理論ではなく実践なのだ。説かれたことは全国各地の報徳会で実践されなければならない。前掲の著書では、花田はその実践方法を大変詳細に述べている。まず、各地で報徳会を結成する。この報徳会は決して大規模であってはならない。町内規模で作られるものである。また一世帯当たり二人の人物が報徳会に参加することを求められていた。大規模だと活動しないものが出てくるからである。幽霊会員が出ないように個別の報徳会は大組織にしていなかった。また、報徳会は会費を徴収していなかった。¹⁵

報徳会は月一回のペースで開会され、まず全員で君が代を歌い、教育勸語を唱える。そして、道徳の講話などを聴いたりした後、毎月の「実行問題」を決

める。¹⁷この「実行問題」は必ず実行されなければならない。実行できない場合は、できるまでやらなければならない。この「実行問題」こそは、花田の率いる報徳会の重要な点である。一見すると、大人がまなじりを決してやらなければならないものとはとても思えない項目が並ぶ。最初に必ずやる実行問題は「履物を揃える（帰るときに他人の履物を履いて帰らない、ということが加わることもある）」である。その次は「時間厳守」である。報徳会は遅刻したり、途中早退したりしてはならないのである。

こののちも、ひたすら瑣末きわまる実行項目が続いていく。「食事はよく飲んで食べる」「手紙のあて名は正確に書き、切手は左上に貼る」「朝は早く起きる」「借りたものは返す」「出かけるときは家族に行き先を告げる」「読んだ新聞はたたむ」などである。

しかしそこに、少しずつ道徳的な項目や、明らかに天皇帝制国家の秩序を受容し、恭順を命ずるものが含まれていく。たとえば「腹を立てない」「口ごたえない」「そして「祖先・神への礼拝」さらに「朝、宮城遙拝をすること」「祝祭日には国旗を立てる」「天皇の写真が載った印刷物は丁寧扱おう」という項目が入ってくる。これらの実行問題には上下関係や強弱の度合いはない。すべては必ず自然に実行されるようにならない。生活を合理化するための整理整頓と、道徳秩序の維持と、天皇帝制国家への服従は一直線につながっている。それぞれの項目を内面化することによって、教育勅語が命ずる国民の理想が内面化される、ということの花田は考えていたのである。しかも、ここに加わればやらざるを得ないメカニズムも花田は考えていた。少数で「やろう」と大半のものが言い始めると、反対しづらい。花田は言う。「如何な横着者でも其時だけはやる気になる。多勢に無勢仕方なしにもやる気になる。名譽は誰もが保ちたいから、矢鱈に反対も出来ずして、総体が賛成するのであります」¹⁸。小さな集団にするのは、このあたりの同調性に期待していると考えられる。単に道徳実践の集団と言うより、人を訓練する心理的な機能などまで計算に入れている。このような活動で模範的な人は機関誌で紹介された。¹⁹花田が機関誌や著作で礼賛する人物は、吉田松陰・西郷隆盛・大正期以後は乃木希典がこれに加わった。これは複雑な部分をはらんでいる。西郷はかつて自身が従ったこともあるが、当時は国家に対する「反逆者」だった人物である。しかし、松陰と乃木という人物を掲げることにより、花田は尊皇思想を強調するので

あった。

花田の説く内容はきわめて通俗的で時に陳腐にも見える。例えば、「浜の真砂のとも磨き」や「殿様もかかんで入るかやの内」などの言葉で、労使や地主・小作人の協調関係を説いたりするものであった。上下秩序や階級を認めつつ、相互が協調・融和することで社会の円満な運営をめざすという内容である。だから、平等を目指す運動などには敵対的な姿勢を見せざるを得なかった。「差別があり高低があつて、初めて興味がある」と花田は言い切る。花田は「国家を顧みざる博愛平等主義は実に謂れなき論たるを失はず」²⁰とまで断言し、報徳会内の疑似平等性が意味するものを語っていた。階級・社会的格差が容認されているからこそ、報徳会内部だけの「平等性」が必要なのである。そうであれば、後述のような社会主義運動に対する姿勢は当然のものであった。

報徳会は、一九一八年にさらに大きな展開を迎えた。「一一会」という別組織が結成されたのである。これは、花田と以下の一人で発足したことからこの名前が付いた。

田尻稲次郎、大迫尚道、上原勇作、北条時敬、鈴木馬左也、平沼騏一郎、齋藤実、根津一、床波竹二郎、小山秋作、土岐嶺

鹿兒島出身のつながりも多くあるとは考えられるが、軍人や政治家・財界人などの大物ぞろいである。どこからこれだけの知遇を得られたのかは明確ではない。報徳会と異なり、この一一会は会員を広く求めず、新規会員は全会員の承認がなければ入会を許されなかった。²¹花田の活動にはこのように、政・財・軍の関係者によるネットワークが創られていた。一九一九年に報徳会は本部を京都桃山に移転した。この時も、鹿兒島出身の財界人村野山人（私財を投じて乃木神社を京都に創設した）と山口・長府在住の人物桂弥一（軍人乃木希典の友人。下関市立長府博物館の前身を創った）が助力を与えたという。この土地に、全国から四万円もの資金をカンパで集め、花田は「報徳会堂」を建設させるに至ったのである。

この前後から、花田は海外へも報徳会の組織を拡大しようと努めた。一九一七年には植民地朝鮮で報徳会結成の報が入っている。²²さらに、一九二二年の一月から一二月にかけて、朝鮮・満州・山東省をめぐって講演を行っている。

朝鮮半島では二一か所三六回、満州では二〇か所三九回、山東省では三か所一回と、いずれの土地でも精力的な活動ぶりであった。²⁵⁾さらに一九二〇年には皇室から一〇〇〇円の「思召金」が下賜され、一九二二年に花田は藍綬褒章を受けた。報徳会は皇室に認められた組織として活動できるようになったのである。

しかし、大正期に入ると、明治期に一度大逆事件で窒息させられていた社会主義運動などが復活してきた。労働争議や小作争議も出てきていた。また、花田は個人主義の拡大にもきわめて神経を使っていた。²⁴⁾花田は特に関東大震災後、国民精神作興詔書を掲げて国民精神の健全化を訴えるようになった。花田自身、かつて大逆事件に深い関心を持ち、自分で大逆事件被告人を転向させようとしたことがある。²⁵⁾後には死刑を免れた収監者岡本頼一郎(山口出身)と対面し、その転向に感銘を受けたという内容の文章を発表している。²⁶⁾

だが現実はその容易ではなかった。虎ノ門事件で、花田はついにその苛烈なほどの本音をあらわにする。花田が機関誌に発表した文章は、相互に「実行問題」をやらせる一見退屈極まる共同体が一旦危機に瀕するといかに苛酷に個人に襲いかかるかを如実に表している。花田は「全国各戸主は、我家からは将来断じて不敬漢を出さない事を誓ひ、万一教化の出来ない子弟があつたならば、之を匿さず其筋へ申出で、又近所隣でも之を知つたならば、直に其筋へ申出ること」²⁷⁾を訴え、「悪魔祓」の儀式を行った。花田にとって天皇を戴かない思想は「悪魔」のものであり、その思想から転向しない者は肉体ごと抹殺しなければならぬものだったのである。

ところで、花田の報徳会運動がきわめて活発に行われていた土地は、なぜか出身地の鹿兒島ではなく山口県であった。『報徳会三十五年史』には、一九二〇年四月三日現在の全国報徳会数が公表されているが、全国四三三七の報徳会のうち、一七八九が山口県に集中していたのである。²⁸⁾これほど報徳会が集中している土地は他には存在しない(ちなみに鹿兒島は二三四)。山口県での報徳会についてはいくらか二次的な史料が存在する。これをもとにしながら、山口県における報徳会の運動について考察してみたい。

三 山口県における報徳会運動

「過般巡講中なる花田幹事の消息に依れば、山口県吉敷郡の如きは二十ヶ町村孰れも新たに報徳会組織されたるが、之が準備として予め郡教育会、郡役所、及び各学校、村役場の熱誠なる準備あり、殊に其趣意書の如き裏面には花田幹事の履歴さへ書し、之を活版にして配付するが如き、実に注意周到といふべく、今や時代の要求は到る処此種の会合を促がしつゝあるに、翻つて其本元たる我が鹿兒島報徳会の萎微として振はざる所以のもの慨嘆に耐へざるものあり……」²⁹⁾

これは一九一六年の機関誌『報徳』に掲載された記事の一節である。花田は、山口県吉敷郡(今の山口市一帯)を回り報徳会の結成を訴えて歩いた。この時の旅で、花田は吉敷郡内の全町村を回り報徳会の結成を訴えている。花田のホームグラウンドであるはずの鹿兒島よりも自治体当局が熱心に報徳会の組織・指導者である花田の宣伝に取り組んでいたとすら書かれている。いったいこれはどういうことなのか、本節ではこのことについて不十分ながら考えてみたい。山口県で報徳会がもつとも熱心に取り組まれていた場所としては、宇部が知られている。宇部の報徳会については、『宇部市史』もページを割いてその動きについて伝えている。ただ、前節で述べたように、山口県の報徳会結成数はすさまじく多い。他県に比して著しいのである。³⁰⁾そしてまた、報徳会の実行についてもきわめて熱心なように考えられる。その原因の一端について考えられることを挙げてみたい。

公式の歴史によると、山口県で初めて報徳会が作られたのは長府町(今の下関市)だった。その後、まず熱心に結成が取り組まれたのは県東部の熊毛郡であった。熊毛郡は一九一四年に郡長岡村勇二が自ら花田を招いて郡内を講演させ、報徳会を結成させている。この際には郡役所が花田の経歴や報徳会の思想などを説明したチラシを一万枚以上も作り配布している。このような動きが各地に波及し、県内各地に報徳会が作られていったとある。³¹⁾道徳教化運動であるから、やはり当局者が国民に対して働きかけるといった形を取っているが、それでもかなり熱心に住民を報徳会に組織化させようとしている。

このような動きが少し遅れてではあるが大きく拡大したのは宇部であった。

宇部は一九一八年の米騒動の際、労働争議と結びついた大規模な米騒動が発生し、山口から陸軍部隊が出勤して死者が出るほどの大惨事になった。労働争議はこの地では炭鉱の争議であり、炭鉱夫は炭鉱経営者を襲撃した。明らかに米騒動は、宇部での報徳会結成に重要な意味を持っていると考えられる。なぜなら、報徳会結成の鍵になる人物は、炭鉱経営者・政治家の渡邊祐策、そして渡邊に近い人物であった宇部共同義会会長紀藤閑之介だったからである。

宇部で報徳会が結成されるのは、熊毛などからずいぶん遅れて一九一九年のことであった。その少し前に、紀藤閑之介は報徳会の結成を慫慂されたといわれている。紀藤は報徳会は「ええことはええが絶えず刺戟を与えないと永続せん会」と説明を受けたといわれているが、このことは確かに報徳会の性質を理解した発言であったと言えよう。さらに、宇部に小学校校長としてやってきた桂木彦一（吉敷郡などの視学を務めた人物）が報徳会結成に熱心であった。桂木の招きで宇部に花田が来訪し、講演が行われた。しかしこの時、紀藤は花田に対する世話役の態度や、作法の厳格さを見て「一般人にこれ程厳格に強いるのはどうであろうか」と考え、一度は報徳会結成を断念したという。しかし、米騒動以後になって情勢が変化し、一九一九年に至り、ついに宇部で報徳会を結成することが正式に取り上げられた。一九一九年一月、再び宇部に招かれた花田は教念寺において演説し、これを聴いた前述の紀藤と、当時宇部の小学校校長であった椋梨並枝が「やるか」「やらいで」のやり取りで報徳会の組織化を決めたといわれる。

渡邊祐策は最初から報徳会結成に加わっていたわけではないようである。だが渡邊自身は既に一九一六年に「地方改良研究会」を創設し、前述の紀藤や椋梨を交えて住民の規律向上などに取り組んでいた。また、米騒動以後、自身の経営する炭鉱に在郷軍人会や労使協調団体をも結成している。そもそも、宇部においては炭鉱を他地域出身者に取りられないための組織として出発した「達聡会」という組織があった。これは宇部の有権者を網羅し、この会の議決機関代議員はそのまま宇部の村会議員に当選できるほどの強大な組織力を持っていた。これらの動きと報徳会は密接に関連していくことになったのである。一九二〇年には、渡邊の経営する炭鉱にも報徳会が結成された。報徳会と達聡会は恐るべき組織力を誇った。一九二四年に宇部で労働争議が勃発したとき、報徳会と達聡会がこの争議を粉砕したのである。

宇部は県内でも報徳会が急速に作られた都市であったようである。ただ、それはかなり強引なものであったと予測される。また、地域社会が当局や地域の指導的な人物の言うことを容易に受け入れたわけでもなかった。宇部の地方紙『宇部時報』（紀藤閑之介が創刊した新聞）は、一九二〇年三月の時点で「宇部村にては目下農村方面に十ヶ所と、市街方面に二ヶ所ほど設立されて居る」と書き、「何時までも其筋の命令とか役場の布達とかで、盲目的に行つて居るやうでは駄目である、此点に於て彼の報徳会は吾人に一の信念を与ふると共に実行を促がすのであるから、今日の場合に於て最も実用的な指導方法である、此意味からして、吾人は此際各部落共競ふて同会の設立を發起せんことを慫慂するのである」と、地方改良目的で報徳会の設立を訴えた。この記事の隣には、宇部の仏教寺院が報徳会活動に無関心であると非難するコラムも掲載されている。そこには「吾地方では近來花田中佐の報徳主義が頻りに喧伝されて居る、其主張は仏教の説く所と合致して居るにも関せず、仏教家は恬として顧みない、甚だしきは報徳会の何物たるかを解せざる僧侶が多数である」という現状が描かれ、「吾等は地方の仏教家に対しては最早諦めて居る、彼等は到底度す可らずだ、然し切角今日の世に存在して居るのであるから何とか之を活用しなければ国家の不利益だと信じて、又しても覚醒を促したくなるのだ」という、高圧的な口調で仏教寺院の報徳会活動への協力を論じた。

だが、急速に作られすぎた報徳会は結局活動の停滞を生み、恐れられた事態が起こった。会員の活動が鈍り、「毎月行らぬと次第次第に大儀になって、終には「ホットクカイ」となってしまう」という状態に陥ったのである。『宇部時報』は「現状の儘では自然消滅」とまで書き危機感を示した。この記事は報徳会の統廃合を唱えている。

このため、宇部の報徳会は独自の動きを取ることになった。道徳教化団体が自治体の協力を得て活動するのはありうる話である。ただ、いかにテコ入れしても、あくまでそれは民間団体としてであった。

しかし宇部の場合、市当局が報徳会を実質的に下部組織化していくような動きが出てきた。すなわち、宇部市内の町内会を報徳会と合体させたのである。大正後期から昭和にかけては市当局が報徳会を指導し、宇部市は「社会課」の課長に前掲椋梨を据えて報徳会の指導に当たった。報徳会の儀式自体が、宇部の場合常に教育勅語とともに、一九二一年に制定された「宇部市憲」という憲

章的文書を読み上げることが含まれていた¹⁶⁾。宇部の報徳会が最も威力を発揮したのは、一九二六年の皇太子訪問の際である。報徳会は住民動員を担い、住民の統制ぶりが高く評価された¹⁷⁾。注目すべきは、この際に朝鮮人住民が多数参加していたと評価されていることである。宇部報徳会の定めた「実行問題」には、「内鮮融和の為、お互に挨拶を交換すること。特に言葉を慎しみ親切を旨とすること」というものがあり、意識的に朝鮮人住民への融和政策の一環として報徳会の運動が使われていた可能性がある¹⁸⁾。

一九三一年、宇部市は報徳会について、完全に市の下部機関としての役割を担わせることを決定した。市役所で開催された「報徳会常設講師並幹事連合協議会」の席上、「宇部市の報徳会は、花田先生の唱導せらるる桃山報徳会通りに、精神修養のみの報徳会を行ふべきものにあらずして宇部式に行ふべきこと」が決定されたのである。具体的に言えば、「報徳会は修養機関たると同時に自治機関を兼ねたものとする事、即報徳会を自治機関の補助機関とすること」であった¹⁹⁾。結局宇部は町内会が「報徳町内会」と言われることになり、花田の創設した民間の道徳教化団体としての性格は失われていくことになった。

宇部以外の県内他の地域においても報徳会は確実に存在していた。山口の場合も、県庁のみならず山口市役所、山口高等女学校、山口赤十字病院に報徳会が創られていた。これらがどの程度活動していたかは今のところ定かではないが、「報徳県」と呼ばれるほど活動が盛んだったのはどうも事実だったようである²⁰⁾。農村部でも報徳会は、部落会や婦人会、場所によっては子供会とも融合したりしながら活動を展開した。単に道徳的な修養だけではなく、共同体のための貯金や、村落のための事業などを行ったりすることもあったようである。他の県に比して、県や各自治体が率先して報徳会の組織拡大を推進したのはなぜなのか、実のところここからだけではわからない。

小括

花田仲之助の報徳会運動は、二宮金次郎の思想に基づく報徳会運動とは異なり、天皇中心の国家体制になじむ臣民の創造を担っていたと言えるだろう。花田はきわめて通俗的で平易な語り口を用いながら、共同体での人間関係を通じて各個人が天皇と直接忠誠心で結合する関係を作り出そうとしていた。花田は

近代以後、社会に「個人」が誕生する中で、社会そのものの急激な変化に対応すべく動いた人物の一人であったのではないか。まだ現時点では史料を精査しているとはいえないので、あくまで過渡的な評価にとどまる。

とはいえ、「履物をそろえる」や「朝早く起きる」ことを通じて社会主義運動を打倒することができる共同体の構築に至りうる運動を考えたことはやはり驚きである。第二次世界大戦後一応の民主化が達成したと考えられる日本においても残っている日本社会の政治的保守地盤を支え助長したのが、報徳会の運動が今日に残した点ではなかったかと考えられるのである。花田の思想自体は確かに古めかしく、非常に単調である。しかし、各地方の組織と本部との間に組織的な上下関係を明快にせずにしたこと、そして少人数にして組織内の構成員を自発的に行動させる仕組みを作っていたことなどは、現実的で柔軟なのである。あくまで個人の主体性に委ねるようにして統制を強めていくことが可能になるからである。機関誌購読さえ強制しないまま、報徳会は「花田報徳会」として活動を拡大していったのである。

そして、花田の人的ネットワーク組織力にも驚くべきものがある。退役した陸軍将校が、東京ではなく地方からわずか数年で巨大な道徳教化団体を組織し、政財軍の領域から指導的な人物を包摂しているのである。しかもついに報徳会は本部を東京に置かなかった。

山口県における報徳会運動は、自治体当局の支援もありかなり盛んだったほうに入るとされる。それでも、宇部で報徳会組織が急激に発足して一時衰退したように、運動に浮沈があったのも事実である。その反面、他県に比して報徳会の活動は盛んだったと考えられる。それはなぜなのかは小論でも明らかにならなかった。角度を変えて検討しなければならぬ。報徳会と既存の道徳教化団体や、宗教団体との関係も考えてみなければならない点であると考えている。

花田は一九三〇年代以後再び中国への関心を深めた。満州事変後は満州国にわたり、抗日ゲリラ対策の軍事部門「靖安遊撃隊」の創設にかかわったり、一九三五年には溥儀と会見したりもしている。その上、かつて自身が「満洲義軍」として活動した地域に報徳会を復活させようと奔走していたのである。日中戦争が勃発すると、花田は和平工作をすると称し、著書『支那に与ふる書』を日中両国語で出版し、訪中して軍閥の老指導者呉佩孚と会見した²¹⁾。しかし、一九三八年に中国天津で講演中に倒れた。その後、支持者であった桂弥一の死去に

際して体調を押しして弔問の旅に出たあと急速に病状が悪化し、これ以後花田の活動は伝わっていない。一九四五年、花田は敗戦を目前にして鹿児島島の自宅で死去した。

敗戦に伴い、報徳会は一度全国で解体された。宇部の町内会「報徳町内会」もその影響を免れなかった。しかし、敗戦後しばらくしてから、全国で報徳会関係者によって報徳会復活が起こった。京都では報徳会が復活され機関紙発行や学校設立などまで行われていたようである。また、鹿児島では一九四九年児童養護施設「大村報徳寮」が設立されている⁵⁴⁾。山口県で報徳会運動を継承する存在があるのかどうか、今のところ筆者はまだ突き止めていない。本論文が何らかの捨石となれば幸いである。

注

- (1) 中村雄二郎・木村礎編『村落・報徳・地主制』東洋経済新報社、一九七六年、海野福寿・加藤隆編『殖産興業と報徳運動』東洋経済新報社、一九七八年。新しいものと、見城悌治『近代報徳思想と日本社会』ペリカン社、二〇〇九年。
- (2) 並松信久『報徳思想と近代京都』昭和堂、二〇一〇年。
- (3) 山本悠三『近代日本の思想善導と国民統合』校倉書房、二〇一二年。
- (4) また、これは筆者がこれまで行ってきたシベリア出兵研究や、在外邦人戦争被害への「救恤」についての解明作業と全くかけ離れたものではないと考えている。
- (5) 宗近実平編『報徳会三十五年史』報徳会、一九三六年。筆者は二〇〇一年に文生書院から復刻されたものを用いた。
- (6) 『花田仲之助先生の生涯』自費出版、一九五八年。
- (7) 石光真清『曠野の花』中公文庫、一九七八年。『花田仲之助先生の生涯』では、全く違う場面として描かれている。田村がウラジオストクに上陸した際、僧形で出迎えたうえ、それを責めた田村に反問したというものである。いずれが史実なのかには判断しがたい。
- (8) 『報徳会三十五年史』八八頁以下。ページ数は復刻版の場合、原書と異なるが、ここでは原書のページに依っている。

(9) 植村はロシア軍に捕らえられて結局生還しなかった。花田が調べたところでは、ロシア軍は植村から情報を取ろうとあえて殺さなかったが、植村は歩くこと、話すこと、飲食の一切を拒否して餓死したといわれる（後述の『日露戦争秘史』実録満洲義軍による）。植村については、日露戦争後遺稿集『禅剣遺稿』が刊行されている。ここには鹿児島における植村と花田との出会いなどが書き込まれている。筆者は駒澤大学図書館所蔵のものを閲覧させていただくことができた。貴重な蔵書を貸してくださった同館に記して感謝を表す。

(10) 隈元常矩『興亜記』春江堂、一九四二年、山名正二『日露戦争秘史』実録満洲義軍』月刊満洲社東京出版部、一九四二年。他にもあることは筆者も知っているが、遺憾ながら未見である。これは公式戦史にも載らない秘密の作戦だった。『報徳会綱要』（一九二八年版を参照することができた）に紹介された花田の半生には、「その事実は知る者が知るばかりで、茲に明記することは出来ぬ」（一四頁）とだけ記されている。第二次世界大戦期になって当事者が語るできるようになった理由は不明である。

(11) 『花田仲之助先生の生涯』九九頁。

(12) 『報徳』について、筆者は東京大学明治新聞雑誌文庫に所蔵されているものがある程度閲覧した。ほかには宮崎県都城市の図書館に、上原勇作の蔵書として保管されているものがあるようである。東京大学の所蔵になるものは創刊号（ただし、なぜか一九一五年に増刷されたもの、という。創刊号は何度も印刷されて配られたらしい）があり、一九三三年までのものがある。ただし、かなり欠号が多く、全く残っていない巻もある。また、筆者自身も古書店よりいくらか購入したものがある。昭和期には、さらに『斯の道』という月刊誌が創刊されている。ただしこの雑誌はほとんど残っておらず、遺憾ながら筆者も内容を確認できていない。

(13) 『花田仲之助先生の生涯』には、当時生存していた花田の側近などの懐古談も載っている。花田は極めて禁欲的な生活態度を維持しながら全国を回っていたらしい。『米寿紀藤閑之介翁』私家版、一九五七年では、宇部を訪問した花田に豪華な食事を供して叱責を受けた人物がいたというエピソードが掲載されている。

(14) 『報徳実践修養講話』洛陽堂、一九一二年。国立国会図書館の近代デジ

タルライブラリーで参照することができる。ここでは、自らの報徳会が他の「報徳」を掲げる集団と同じものと「思ひ違ひ」をしてはならないとまで強調している(一五六頁)。

(15) 『報徳実践修養講話』一七六頁。

(16) 報徳会で発行されていた『報徳』も、会員に購読義務があったわけでもないようである。昭和期に入ると、一度は機関誌購読を「実行問題」に加入した事実がある。あまり読まれていなかったのか、個人単位での購読が少なかった(家族や集団で一冊というように読まれていた)からかはここからではわからない。『報徳会三十五年史』一三九頁。

(17) 「実行問題」は機関誌『報徳』や各種刊行物で確認できる。『報徳』には各地報徳会の活動報告が掲載されている。ここでも各地報徳会の行った実行問題が掲載されている。このうち、「履物を揃える」は今日でも仏教思想と結びつけられて実践されている場合がある。実行問題のアイデアは宗教や道徳など、各種思想に根源を有するようである。

(18) 『報徳実践修養講話』一七七頁。

(19) 『報徳美談』というタイトルで出版されている(残念ながら筆者未見)。

(20) 『報徳実践修養講話』一二六頁。

(21) 『報徳会三十五年史』一六一頁。のちに入会を許された中には伊集院彦吉やのちの首相鈴木貫太郎、戦後も活動した保守思想の大物安岡正篤などがある。なぜか山口県知事を務めた官僚中川望も入会を許されている。並松信久、前掲『報徳思想と近代京都』では、一一会メンバーの大半は、花田と禅寺で一緒に修行をした仲間であったという。

(22) 「鶏林の第一声」『報徳』七巻一号、一九一七年。

(23) 「報徳真髓」『報徳』一二巻二号、一九二二年。

(24) 花田の二冊目の著書『報徳修養新話』光昭館書店、一九二二年(国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで読める)では、「利己主義」という形で個人主義批判も目立つ。

(25) 『報徳会三十五年史』一一一頁。

(26) 「大逆の子を泣かした親心」『報徳』一四巻四号、一九二四年。この文章は後に再録され、『報徳会三十五年史』にも収録されている。

(27) 「時局に際し民風を作興すべき方法如何」『報徳』一四巻二号、一九二四

年。

(28) 『報徳会三十五年史』一七七頁。山口の次に多い熊本県で六四二である。なぜ山口県なのか、ということの反面、なぜ鹿児島ではこれほど受け容れられないのかも気にかかるころではある。後にはどうも岐阜県において、県知事の音頭取りで相当報徳会が拡大したようである。これは同県の小作争議が原因だった。

(29) 「花田幹事巡講日録」『報徳』六巻一号、一九一六年。ちなみに、山口県立大学のある宮野には一九一六年九月一〇日に訪問し、八〇〇人もの聴衆を相手に講演したとある。参加者は「直に(報徳会を)組織することに決定す」とある。この旅では驚くべき人物が同行していた。かつて花田が「清水松月」だったときにウラジオストクにいた僧侶安倍道暎である。大分に戻り僧侶をしていた安倍を花田自身が訪ねて同行を頼んだ(それまで本人は拒んでいた)とある。この号については、筆者が古書店より購入したもの。

(30) とはいえ、昭和初期にはこの数が著しく減じ、一三〇〇になっている。『報徳会三十五年史』六四四頁。後に言うような、作りすぎたゆえの統廃合の結果だろうか。

(31) 『報徳会三十五年史』六三三頁以下。熊毛郡で配布されたチラシの全文も収録されている。ただ、県庁に報徳会ができるのは一九三二年と遅い。長府は桂弥一の関係であろう。

(32) 高野義祐『米騒動記』自費出版、一九五九年。

(33) 『素行渡邊祐策翁』乾巻、一九三六年、四七八頁以下の叙述を見ると、これは一九一八年、米騒動以前のことにらしい。

(34) 『米寿紀藤閑之介翁』、六六一六七頁。

(35) 『素行渡邊祐策翁』乾巻、四七九頁。

(36) 『素行渡邊祐策翁』乾巻、四二二頁。この会の最初に行ったことが「住民に左側通行を励行させること」だったというのは印象的である。報徳会の実行問題にもこれがあるからである。また、紀藤閑之介は、一九一五年に「時間励行会」を創り、時間厳守・遅刻厳禁の運動を行っていた(『米寿紀藤閑之介翁』五七頁以下)。このような、法規や社会規律を徹底して上から内面化させるといふ発想は、当時の当局者に共通するものであった

- だろうか。
- (37) 在郷軍人会については『素行渡邊祐策翁』乾巻、四七二頁以下、労使協調組織「労役者救済会」については、同書四八六頁以下。
- (38) これについては、戸島昭「宇部達聡会について」『宇部地方史研究』二号—四号、一九七三年—一九七五年。
- (39) 『素行渡邊祐策翁』乾巻、五四二頁以下。
- (40) 戸島昭、前掲「宇部達聡会について」。
- (41) 「町村長集会の決議を見て報徳会の普及を促す」『宇部時報』一九二〇年三月二一日。
- (42) 「報徳会と仏教」『宇部時報』一九二〇年三月二一日。前年三月二日の記事「花田中佐の報徳会」でも「お寺は何時まで珍粉漢のお経を讀で、爺媼の臍線や炭鉾の賽錢を覗らうばかりが能でもあるまい、何か一つ、当世向の芸当を演じて試るがよろしいから、報徳会の下請けをやったらどうじゃ」と、かなり挑発的な書きぶりであった。
- (43) 『報徳会綱要』四一頁。
- (44) 『宇部市史』史料編下巻、七一一—七二五頁。『宇部時報』紙の記事。こゝでも、報徳会が「ホットク会」と言われていたことが記されている。
- (45) 椋梨が宇部市社会課長となったのは、勤務していた小学校で生徒の死亡事故が発生し小学校校長を辞任したからである。『米寿紀藤閑之介翁』七一—七二頁。椋梨は精力的に報徳会活動を推進し、高く評価された。
- (46) 「宇部市憲」は『宇部市報徳会二十周年誌』一九四〇年、巻頭に掲載されている。宇部の報徳会儀式については、同書二〇頁。
- (47) 『報徳会三十五年史』二二三—二二六頁。
- (48) 『宇部市報徳会二十周年誌』。宇部市には報徳会以外にも、朝鮮人住民を包摂するための組織があった。『宇部市史』下巻、六三三—六三五頁以下参照。
- (49) 『宇部市報徳会二十周年誌』七三—七四頁。
- (50) 『報徳会三十五年史』。山口赤十字病院に報徳会があったことは前掲『報徳会綱要』でわかる。機関誌『報徳』を参照すると、山口県出身者の存在は、報徳会においてある時期まではかなり大きいと考えられる。『報徳会三十五年史』の編纂者宗近実平も山口県出身であった。反面、宇部出身の歴史家高野義祐は、自伝的著書で戦前期宇部の犯罪件数が多かったことに

- 触れて「社会教化機関が完備して犯罪が増加するとはどう言うことであろう」と皮肉交じりに宇部の報徳会について回想している。高野義祐『新川から宇部へ』ウベニチ新聞社、一九五三年、一〇八頁。
- (51) アジア歴史資料センター史料B04013004800は、花田による一九三六年の満州訪問の様子について記している。
- (52) 和平工作については『花田仲之助先生の生涯』を参照。花田仲之助『支那に与ふる書』第一出版社、一九三八年（なぜか筆者所蔵の本は奥付の刊行年が削り取られていた）。
- (53) 小森郁夫編『鶴堂還暦記念文集』株式会社小森貫商店、一九六二年。第二次世界大戦後復活した「京都報徳会」の活動がこれでは記されている。
- (54) この施設は現在「大村報徳学園」と改称して現存している。このことについては、<http://blogs.yahoo.co.jp/djxxq447/50884975.html>のブログを通じて知ることができた。

(付記) 本論文は、平成二四年度山口県立大学創作研究助成事業による研究成果の一部である。